

外套のえりを立てて

外套のえりを立てて私たちは歩いたことがあつた
ショーウインドの中からは金の指環や春の花が
私たち二人の姿をうつすらと映した向ふ側からこちらを見てゐた
私たちはウインドのガラスの上で目と目を交したものだつた

立ちどまつてゐるうしろを通る道行く人々をおそれながら
ひくい声で 私たちは真珠の首かざりを指さして
お前の首にかざられた時の一つ一つの重みについて話しあひ
貧しい二人はあきらめのはかないほほゑみを交したものだつた

冬の空に急に雷鳴がやつて来るなんて
大つぶの雨が 乱れた雲の合ひ間から降りはじめ
あわただしい戦争の中で私がお前を失ふなんて

お前は誰か見知らない男を愛するやうになり
愛したことを私に知らせないままに別れを告げてよこし あの時
道行く人々が二人の間にわり込んだやうに別れ別れになるなんて